

## 六 卸して見れば敵も味方に

「疑心暗鬼を生ず」とは古今の眞理。怖い／＼と思つて夕暮野路を行けば、屹度尾花が幽霊に見え、そよ吹く風が恨めしやと聞える。彼奴々々と思へば屹度彼奴が悪い者になつて仕舞ふ。板を擔いで居ては眞相は見えぬ。自分免許では世間に通用せぬ。下せくその板を。「鬼婆なりと人の云ふらん」と云ふた風の人も、板を下して見れば、「佛にもまさる心と知りもせで」と、恨むどころか御禮を云はねば濟まなくなる。良薬は口に苦い、苦い良薬も呑んでみれば病氣が療る、療つて見れば苦々様ぢや。

蠅と蜘蛛の大嫌ひな若い王子が、西洋の或國にあつて、「若し出来ることならば、蜘蛛と蠅を一匹も残らず、此の世界から追拂つてしまひたいもんだ」とは、その常に口にし、且つ思ふ所であつた。或時のこと、王子は大激戦をした後、敵のためにひどく打ち破られて、何處かへ身を隠さなければならぬことになつた。やむなく、とある森の中へ走り行つて、大きな樹の下へ行つて身を横たへたが、戦争の疲れが一時に出て、そのまゝ寢入つてしまつたのである。之を見付け出した敵の一人、すわごさんなれと劔を抜いて、拔足差足王子の許へ近づいて來た。ところへ丁度其時、蠅が一匹飛んで來て、王子の顔を這廻り、王子の目をつき覺めさせた。王子は驚いてムクと起ち上りヒタと睨みつけたので、敵はその勢ひに恐れて逃げ去つた。爲に王子は危い命を拾はれたのである。其夜、王子はこの森の中にある、大木の洞に身をかくして寢られた。すると夜の中に一匹の蜘蛛が出て來て、洞の口に縦横に巣を張つて、すわ敵殿ごさんなれと、身構へしてゐた。夜明頃、敵の二人が王子を探しに來て、恰も洞の傍を通りかゝつた時、一人は言つた。「オイ、君、きつとこの洞の中に隠れてゐるよ。」イヤ、こんな處に居るものかい、若し

此處に這入つたとしたら、其の蜘蛛の巢を拂ひ除けたに違ひない、蜘蛛の巢が此の通り綺麗に張つてゐる所から考へると、居ない事は慥だ」。斯う云つて二人はカラ／＼笑つて行つてしまつた。王子は復、危い命が助かつたのである。二人の影が見えなくなつた、王子は洞から出て来て、どうして自分の身の助かつたかと云ふ事について考へてみられ。一日は蠅の御蔭で、一日は蜘蛛の御蔭で、それが揃ひも揃つて自分の嫌ひなものであつた事を、不思議に思はず居られなかつた。

我等も亦氣の付かない幾多のものに、危い命拾を幾度さして貰つて居るか知れない。思へば感謝の至りである。嫌ひでくならなんだ王子も、命を助けられてみれば、蠅と蜘蛛とに感謝せずに居られず、愛憐せずに居られなんだであらう。下せ板を、板を下してみれば法界悉く恩境ではないか。

明日は正月元旦だと云ふので、大變な騒ぎで掃除を致し、彼方も拭き、此方も拭き、拭き立て、床の間の飾りには、餅は申すに及ばず、勝栗・海老・昆布などを堆く盛上げ、その夜も明けて翌朝になると、早曉から起きて、若水を汲むやら、晴衣を着るやら、大騒ぎをして、神棚などにも禮拜を遂げそれから座敷で屠蘇を祝ひ、目出度う／＼を、家内中が打ち揃うて、交換す頃になつた時、夜もほの／＼と明けはなれ、床の間には目出度い三幅對が、美はしく光を放つ。松・竹・梅・福壽草。如何にもお目出度い。大恐悅の主人。不圖、鏡餅の側を見れば、眞黒い蛙を踏み潰したやうなものが、處得顔に座を占めて居る。ハテナと覗けば、こは如何に。誰が置き忘れたのか、雑巾の／＼／＼したやつ。驚くまいことか、縁起屋の主人。「誰が怙んな所へ、雑巾なんか置いたのだ、何と云ふ情ないことをする、あゝ今年も屹度碌な事ではあるまい、腐つた雑巾を、元日早々から、床の間で威張らせて置くなんて：

…甲高い聲に、悄氣かへつては「もうくお目出度いなど、云うて呉れるな」と。プンく怒り出して、家内中に八つ當りを始めた。

すると、其隣に住んでゐる滑稽家の歌人があつて、「やお目出度う」と御年始にやつて来た。けれど主人はそれどころでない。「お目出度いも何もあつたものか、最早今年は私も駄目です」と食つてかゝる。ハ、ア又お株が始まつたなどと思つたが、「それは又云何して……」。「云何してもあつたものかこれ此通り、元旦早々、床の間で、腐つた雑巾を威張らせ置く、汚れた雑巾で、年が汚れて了つた」。「ナニ、それでこそ餘計にお目出度いのぢや」。「先生、冗談云つちやア困る、それが何故お目出度い……」。「そんなに怒らずとマアお聞き」。

雑巾を當て字で書けば藏と金、あちら福々こちら福々

さあ主人、喜んだの喜ばぬのつて、「成程こいつはお目出度い、此處へ雑巾を置いて下さつたのは、何方だなア、能うこそ置いて下さつた、御禮を申さねばならぬ」と。打つて變つた上機嫌になつたさうです。

板を擔いで居ては、歳までが擔れたやうに見える。板を下してみれば、腐つた雑巾までが、誰が置いて下さつたかと云ふやうに、有難う嬉しうなる。咄この擔板漢、板を下して見よ。

三界は我有にして衆生は悉く吾子なり。一子の如く憐念し給ふ如來の大悲が、何故に私一人の爲であると戴かれなにか。自力我慢の板を擔いで居ては、恵も却て仇となる。下せ汝が邪見憍慢の悪板を。自身は現に是れ罪惡生死の凡夫と、自己の眞相を見究めた時、同時に無疑無慮乘彼願力、私ゆるの御慈悲と徹底することが出来る。之を張天覺（本書聞（法の下））に見よ。村上佛山

（拙著『佛の心』と親心』参照）に見よ。